

研究プロジェクト・研究ノート

ミルトンとジェンダー

——「有徳の母」サラの希薄な存在をめぐって——

小 山 薫

学芸学部・英語英文学科

序

ミルトン (John Milton, 1608-74) 研究の長い歴史において、彼の女性観——現代的関心によると〈ミルトンとジェンダー〉——は、時代を超えて多くの批評家の注目を集め、論争を呼び続けてきた¹⁾ 〈古くて新しいテーマ〉である。18世紀のジョンソン博士 (Samuel Johnson) に端を発する〈ミルトン女性蔑視説〉は、20世紀初頭のウルフ (Virginia Woolf) を経由し、1970年代のフェミニズム文学批評の熱気の中で、一時、ミルトンの人と作品への集中砲火となった感がある。しかしそれは「フェミニズム批評自体が(……)建設的な方向へと変質を遂げる過程で」(佐野「女性観・結婚観」11) 軌道修正され、ウィトリック (Joseph Wittreich) の *Feminist Milton* 出版 (1987) に象徴されるミルトニストの巻き返しによって、現在では〈フェミニズムの原動力〉としてミルトンを評価する傾向が主流になりつつある²⁾。

初期のミルトン批判の中には、彼の(二人の妻の病死に伴う)三度の結婚や、娘たちとの軋轢など、私生活に関する偏見に根ざすものも多かったが³⁾、彼のように、断固とした信念に基づいて激動の人生をダイナミックに生き、散文でも詩でも積極的に自己を語った作家⁴⁾を理解

する上で、個人としての言動を適切に考慮に入れることは、むしろ不可欠であろう。ニュー・クリティシズムの時代となっても、⁵⁾ 伝記を無視したミルトン批評に限界があることは、昨今のミルトン研究の動向からも明らかだと考える⁶⁾。

本稿で焦点を当てたいのは、彼の母サラ (Sara Milton, 1572?-1637; 旧姓は Jeffrey) である。彼の未亡人となった3番目の妻エリザベス (Elizabeth Milton; 旧姓は Minshull) や弟のクリストファー (Sir Christopher Milton)、甥 (姉 Anne の長男) のエドワード (Edward Phillips III) といった近親者への聞き取り調査から始まった〈ミルトン伝〉は、様々な著者の手によってまとめられ、300年以上にもわたって追加や修正が重ねられた⁷⁾。20世紀中葉以降に的を絞っても、フレンチ (John M. French) やパーカー (William Riley Parker) による精緻な業績があり、最近では、ルワルスキー (Barbara K. Lewalski) のミルトン伝に引き継がれて、より洗練され、体系化されてきたわけである⁷⁾。しかし、ロンドン大火 (1666) で消失したミルトンの生家の間どり⁸⁾に至るまで詳細な知識を得ながら、彼の生母については具体的情報に乏しい⁹⁾というのは、なんとも不思議ではないか。“It is a pity that we know so little about Sara Milton” というパーカーの嘆き (1: 8) は、好意の有無にかかわらずミルトンに関心をもつ、すべての批評家が共有するものだろう¹⁰⁾。単に〈17世紀イギリスの代表的詩人〉というだけでなく、

Milton and Gender: Concerning the Quiet Presence of His “Virtuous Mother,” Sara

〈ピューリタン革命の理論上の指導者〉としてのミルトンの重要性、さらに前述のフェミニズム文学批評へと至る、影響の大きさを思う時、彼を生み育てた女性にわれわれが関心をもつのは当然である。従来のミルトン伝から抜け落ちてしまった〈母サラの鮮明な人物像〉を求めて、埋もれた資料を発掘するための努力が、折々に様々な人の手を介して、多様な形で続けられたことだろう。その一端は、*Milton Quarterly* (1981) に掲載されたレオ・ミラー (Leo Miller) の報告、“On the So-Called ‘Portrait’ of Sara Milton” (113-16) から窺い知れる¹¹⁾。

さて、これまで伝記的著述で繰り返し強調されてきたのは、サラがミルトン自身も含めて、近親者が認める「有徳の女性」だったという評判と、「眼が弱かった」という息子への遺伝関係である¹²⁾。ではなぜミルトンは、「有徳」という誇るべき資質をもった母サラのために、もっと言葉をつくし、彼女の記憶を後世に残さなかったのだろうか？ 研究者の中には、彼の詩にエディプス・コンプレックス的傾向を探るといふ、大胆な精神分析アプローチ¹³⁾も存在する一方で、〈ミルトンの著述における、生母サラの存在の希薄さ〉を再認識させる指摘——若き日のラテン詩 *Ad Patrem* (父に寄せて) と並ぶ、*Ad Matrem* (母に寄せて) が存在しないこと (越智 61) や、大学時代からエレジーを何篇も残したミルトンが、母サラの死に際して、何の詩も書かなかったこと¹⁴⁾など——も見出せる。“Milton’s rather impersonal description of her [Sara] might suggest some lack of warmth in their relationship” というルワルスキーの示唆 (4) は、これと同様の認識から生じたものだろう。

ミルトンにとって、母サラとは、いかなる存在だったのか？ 彼女へのミルトンの言及が少なく、淡々とした印象を与えるのは、フェミニスト神学で指摘されてきた〈聖書における、女性の存在の希薄さ〉¹⁵⁾に通じる、「抑圧された母親の地位」(シュッキング 100-03) を示す

ものなのか？ 本稿の出発点は、こういった疑問である。過去の研究によって明らかにされたミルトンの伝記から、断片的なものであっても〈母サラに関する情報〉を整理・検討し、再考したい。

I

まず確認したいのは、著述や記録で見える限り、ミルトンは〈両親の大きな愛と庇護〉に恵まれた¹⁶⁾ことである。よく知られているように、同名の父ジョン (John Milton, Sr., 1562?-1647) はオックスフォード近郊のヨーマン階級出身であり、オックスフォード大学で教育を受けた¹⁷⁾後、父親 (Richard Milton, ローマカトリック教徒) との宗教上の対立が原因で廃嫡され、ロンドンに出て、公証人として成功した。パーカーによると、彼は洋服商であった故ポール・ジェフリー (Paul Jeffrey) と妻エレン (Ellen) の長女サラと、1600年頃に結婚したようだ。そして、後の大詩人ジョン・ミルトンは、この夫婦が、未受洗の子供を (少なくとも一人) 埋葬する経験をもった後、長女アンに続いて、46歳の父と36歳の母(?)の〈待望の息子〉として誕生したらしい (1: 5-6)。“In seventeenth-century London only one child in ten survived to his fifth year”¹⁸⁾ という時代背景を考慮に入れるなら、この両親の喜びと自覚のほどは容易に推察できる。廃嫡され、故郷を捨てることになった父ジョンにとって、サラとの家庭は、文字通り〈唯一の家庭〉であり、模範的なクリスチャン・ホーム¹⁹⁾を実現するべく、努力を重ねたと思われる。ビジネスの才覚があっただけでなく、セミプロの作曲家としても活躍した父ジョン²⁰⁾は、物心両面で家族を手厚く支えたようだ。彼は長女アンの結婚に際して多額の持参金を贈り、就学前の長男ジョンのために貴族のように家庭教師をつけ、宮廷風の肖像画まで描かせた²¹⁾。パーカーはミルトンの両親を評して、「溺愛」という表現を繰り返しているが (1: 22-23)、ケンブリッジ大学で修士号を取得した後も、聖職の道に進んでくれない

息子を、引退生活のための郊外の家に同居させ、さらに5年以上も研鑽の日々を許した²²⁾という点で、ミルトンの両親の、彼に対する愛情と信頼が〈並々ならぬ熱いもの〉だったことは確かだろう。

II

この〈父母への感謝〉と〈息子としての誇り〉が端的に読み取れるのが、1654年に出版された *Angli Pro Populo Anglicano Defensio Secunda* (イングランド国民のための第二弁護論) の有名な箇所である。原文はラテン語であるため、まず日本語訳を引用しよう――

わたくしは由緒正しき家柄の出であり、ロンドンに生まれたのであります。父は卓越した高潔なる人物であり、母は誉れも高く、慈善の行ないにより近隣でも評判の婦人でありました。(新井、野呂 394)

国王チャールズ一世の処刑(1649年)に続く政治的混乱のただ中で、王党派を論駁する目的でなされた著述とはいえ、ミルトンはこの折に自信をもって、自らの〈誇るべき生まれ育ち〉を披瀝しているわけである。とくに“*matre probatissimâ, & eleemosynis per viciniam potissimum notâ*”²³⁾ というミルトン自身の言葉は、母サラの(具体性に乏しくても)人間像を伝える、数少ない資料である。これまで注目されてきた、その他の証言としては、“the Consortship of a prudent virtuous Wife” [思慮深い、有徳の妻の内助] という(たぶん、父ジョンの仕事関係者による)言葉や、サラの孫エドワード・フィリップス(Cf. 本稿 86)による“A Woman of Incomparable Vertue and Goodness” [比類なく有徳で善良な女性] という発言がある²⁴⁾。

カトリックのマリア崇拝に対抗して、プロテスタントは「実際の女性の地位を高めようとする傾向」をもつ(竹下 74-75)という。そしてシュッキングによると、とくに17世紀イン

グランドの有^{ブルジョア}産ピューリタン家庭では、「妻の地位が向上し」、夫の「補佐」「代理を務める」という形で、子供の教育や使用人の管理にたずさわったらしい(35-38, 83, 103)。こういった家族関係をミルトンの家庭にあてはめると、“hard-working, pious businessmen and their families” (Parker 1: 7) が集まるロンドンの中心街で、“self-made bourgeois scrivener” (Lewalski 3) の「思慮深い、有徳の妻」として、「内助」を發揮したサラの日常がリアルなものとして想起できる。ルワルスキーが彼女を評して、“a woman who fulfilled the duties prescribed for the bourgeois Protestant wife — *helpmeet to her husband* and dispenser of a prosperous family's charity” (4) [Italics mine] と位置づけているが、客観的な判断だと考える。3人の子供に恵まれ、「夫に相応しい助け手」として、ミルトンの母サラが、自信と使命感をもって、彼女なりの社会活動に励んだことは否定できない。しかも彼女が、前述の肖像画についてパーカーが指摘している通り、10歳のミルトン少年をプロテスタントらしく短髪にさせながら、優美な装いをさせる“an Elizabethan woman, a merchant-tailor's daughter, who loved rich and beautiful things”であった(1: 8) ことにも注目したい。ミルトンの母サラは、ピューリタン社会の〈良妻賢母〉〈理想的な資産家夫人〉として、関係者に良い思い出だけ残し、「有徳の」人生を全うしたと理解する。

III

そこで、冒頭に提起した問題に立ち返ろう――ではなぜサラ・ミルトンに関する記憶は、ミルトン伝ばかりか、息子ミルトン自身の著述の中でさえ、ごく限られたものしか残されなかったのか、という疑問である。どんな場合にも言えることだが、やはりその答えは、〈社会的要因〉と〈個人的要因〉の両面に求めるべきだろう。そして、前者の〈社会的要因〉については、〈時代通念の限界〉という、単純な、し

かし圧倒的な理由に収斂されると思われる。先に紹介したシュッキングの報告にある通り、当時ミルトン家が属したイングランドの^{ブルジョア}有産ピューリタン家庭では、「妻の地位が向上し」、夫の「補佐」「代理」として機能したという（Cf. 本稿 88）。ただし、この新たな「妻の地位」は、シュッキング自身も認めているように、「母親は家族のなかで父親から権威を受け取る」という枠内のものであり、結婚問題を始めた重要な決定において、成人した息子に母親が単独で及ぼす影響は皆無に近かったらしい²⁵⁾。つまりシュッキングの報告にある当時の女性の「地位」は、あくまで相対的な「向上」にすぎないのであって、「ブルジョア家父長制下における女性の地位の低下」（滝沢 31）という率直な指摘や、“the seventeenth century, male-dominated perception of woman as an honoured sub-species”（Bradford 174）という主張と、内容的に矛盾しないことになる。こういった時代通念を考えると、ピューリタン社会の〈良妻賢母〉〈理想的な資産家夫人〉に徹したサラについて、息子ミルトンを含めた関係者や、初期の〈ミルトン伝〉取材者によって〈残すべき記録〉として判断されたのは、「有徳の女性」という、彼女の無傷の勲章がすべてだったのだろう。

次に、後者の〈個人的要因〉だが、これは〈ミルトンの崇高な人生観〉に帰結するものと考えられる。12歳ですでに頭痛を起こすほど、深夜まで猛勉強²⁶⁾していた彼は、〈知的に早熟な少年〉であった。しかも、大学での研鑽と人生経験を経て、彼の学問的野心は〈周囲の期待に応える〉という小市民的動機を脱却し²⁷⁾、〈偉大なクリスチャン詩人〉をめざして、壮大で高邁なテーマを意図的に模索していくことになる²⁸⁾。

こういった人生観の持ち主にとって、両親に対する個人的な^{プライベート}思いを、著述という公^{パブリック}的な領域に持ち込むには、確たる理由が必要となるだろう。先にも触れたように、ミルトンは大学卒業後の研鑽時代（正確な年代は不明）にラテ

ン詩 *Ad Patrem*（父に寄せて）を書いている（Cf. 本稿 87）。しかし従来指摘されてきた通り、この詩は父への感謝を記しつつ、実は“an argument, carefully developed, tactfully phrased, shrewdly climaxed with a flattering promise”（Parker 1: 125）として機能しており、「自己の進むべき道を宣言した」「決心の記念碑」（越智 71, 73）と理解するべきものである²⁹⁾。母サラが60代半ばで亡くなったのは、同時代のことだが、ミルトンは30代直前になっていた。哀しみに打ちひしがれ、やみくもに感傷にかられて、エレジー創作につなげるほど、彼が無邪気な〈マザコン詩人〉でなかったことは確かである³⁰⁾。

結 び

これまでみてきたように、ミルトンは両親の溢れる愛と庇護と期待の下、長年にわたり、きわめて恵まれた〈研鑽と自己練磨の環境〉を与えられた。しかもその両親とは、彼が後年『第二弁護論』という相応しい時機を得て、自信をもって贅辞を捧げ得る、誇るべき立派な父であり、母であった。「卓越した高潔な」父と同様、「誉れも高く、慈善の行ないにより近隣でも評判」だった母（Cf. 本稿 88）の死を彼が嘆かなかったはずがない³¹⁾。ただ彼は、その個人的な^{プライベート}嘆きを、著述という公^{パブリック}的な領域に、意味なく持ち込むことを避けただけである。

『第二弁護論』で自ら語っているように、母サラの死を契機に、ミルトンは父の家を出て、大陸旅行に向かうことになった³²⁾。この経緯については諸説あるが、彼の人生にとって、それは〈親からの旅立ち〉〈精神的独立〉でもあったはずである³³⁾。

「有徳の母」サラの記憶を、彼は著述の中で表立って積極的には留めようとしなかった。しかし、サラの死の半年後に早逝した、友人キング（Edward King）に捧げられた、ミルトンのエレジー *Lycidas* に言及して、パーカーは次のように述べている――

He wrote no elegy when his mother died, but ..., in *Lycidas*, he found a healing outlet for his brooding upon death. *Areopagitica* was a like effort to enlarge and sublimate a deeply personal situation. (1: 415)

ここでパーカーが主張しているのは、ミルトンが亡き母や友への思い、さらには自分自身の将来への不安も含めて、「きわめて個人的な」感情や「状況」を、文学という媒体を通して「拡大させ、昇華させる努力」をした、ということである³⁴⁾。確かにその通りだと実感する。

前述したように、母サラの「内助」に言及してルワルスキーは“helpmeet to her husband”という言葉を用いた(Cf. 本稿 88)。従来の研究によって明らかにされてきた通り、「夫に相応しい助け手」としての妻の役割は、後年のミルトンに終始一貫する〈結婚観の中核〉をなすものであり³⁵⁾、ルワルスキーの言葉がそれを意識したものであることは自明であろう。そして、彼の結婚観が〈男女双方の対等の尊厳〉を基盤にした上で成立していることを再確認したい³⁶⁾。誇るべき父の「相応しい助け手」であった、「有徳の母」サラがミルトンの女性観に基礎を与えたことは間違いない。その面影は、後年彼が物した散文や詩の壮大な文脈に吸収され、普遍化されて、今も静かに存在の輝きを放っている、と判断する。

註

- 1) Cf. “the ever contentious issue of Milton and gender” (Bradford 173).
- 2) 〈ミルトン女性蔑視説〉とその後の修正、ミルトン再評価については、佐野「女性観・結婚観」3-18; 辻「愛と結婚」209-13; Bradford 166-74を参照。
- 3) 佐野「女性観・結婚観」5-7. Cf. 「ミルトンが内心、ピューリタンの家族の精神からいかに遠いところにいたか、それをもっと明瞭に示すのは、彼の殺伐たる家庭状況、娘たちに対する思いやりのなさ、頑迷な父に対する娘たち

の反抗的態度である」(シュッキング 71); シュッキング 118-19. 17世紀ピューリタンの家庭生活に関するシュッキングの論述には具体的で説得力のある箇所も多いが、ミルトンの人と作品については〈偏見の先行する、きわめて独断的なもの〉と判断せざるを得ない。

- 4) Cf. “Most often he [Milton] resorts to autobiography for the rhetorical purpose of defending his qualifications and his character from polemic attack, ...” (Lewalski 1); “For a man like Milton, writing on any subject was a method of self-defence, or self-healing” (Parker 1: 415).
- 5) 白鳥、レジュメ参照。日本ミルトン・センター第30回研究大会(2004年10月16日、同志社女子大学)では、同氏の司会でシンポジウム「ミルトン伝の一側面——W. R. Parker vs. B. K. Lewalski」が催され、伝記研究の必要性を実感した。なお、当日のパネリストと発表題目は次の通りである——川島伸博「若きミルトンをめぐって——ミルトンは宮廷人だったのか」; 富樫剛「ミルトンとクロムウェル」; 川崎和基「堅忍するミルトン」。
- 6) ミルトン伝の先行業績については、Parker 1: v-xv, 2: 675-80に詳しい。
- 7) Cf. 白鳥、レジュメ。
- 8) Parker 1: 6-7, 600. Cf. Lewalski 451-52.
- 9) サラの家系については、古くから研究対象になってきたようだ。たとえば、Parker 2: 676-78, 694-96, 719; S [hawcross], “Milton’s Relatives” 103-04などを参照。
- 10) Cf. 「Skeatは『天才の母は心理学的に見て、その父よりも重要であるが故に、ミルトンの場合にその母Sarahについては、余り多くの事が知られてゐないのは誠に遺憾である』といふ」(越智 60); 「ミルトンの母親についてのわれわれの知識の貧弱さときたらどうであろう」(シュッキング 103); Parker 2: 680.
- 11) 1981年2月13日に、ロンドンの著名オークションであるクリスティ(Christie)が、サラ・ミルトン(49歳)と称する肖像画を売りに出したことが発端で、レオ・ミラーが猛然と、真偽を探る調査に乗り出したわけだが、なんと1940年には、それがミルトン自身(49歳)の肖像画として競売されていたことまで分かり、

- 結局、残念ながら眉唾物だと判断されたようだ。
- 12) たとえば、Parker 1: 8; Lewalski 3-4; French 5: 196-98; 越智 60-61などを参照。
- 13) LewalskiはWilliam Kerriganの説を紹介した上で、“Milton’s two brief references to his mother hardly afford evidence of an oedipal struggle resolved by her death” (74)と断言して、エディプス・コンプレックスの可能性を否定しており、筆者も同感である。
- 14) Parker 1: 167, 415.
ミルトンのエレジーは、*Lycidas*や*Epitaphium Damonis*など、友人や知己に向けられたものがほとんどだが、姪のアン(姉Anneの長女)が急逝した折には、習作として、身内へのエレジー“On the Death of a Fair Infant Dying of a Cough”を捧げている。詳しくは、Parker 1: 40-41を参照。
- 15) Cf. 「女性たちは聖書の中では大変見えにくく、隠された存在になっている」(絹川 23); 絹川 47-49。
- 16) <ミルトン自身の娘たちとの関係>については手厳しいシュッキングでさえ、「ミルトンの居心地のよい生家」(109)と認めている。
- 17) ミルトンの父が受けた教育については、長年、オックスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮とされてきたが、現在では“It may well be ... that his Oxford education consisted largely of training as a chorister at Wolsey’s college” (Parker 1: 4) という説もある。Cf. Lewalski 2.
なお本稿では以降、混同を避けるため、John Milton, Sr.を「父ジョン」と記載する。
- 18) Parker 1: 8. Cf. シュッキング 84.
- 19) 後年のミルトンの人間的成長に関して、Parkerは“Who can doubt that the sources of so much strength lay in an exceptional home, in Christian parents who had not only dedicated their son to greatness but had looked well to the details of preparation?” (1: 196)と述べている。
- 20) 父ジョンの作曲活動については、Parker 1: 10-11が興味深い。
- 21) アンの持参金についてはLewalski 13とParker 1: 18を、家庭教師についてはParker 1: 11-12を、肖像画についてはParker 1: 8と2: 702 n 28を参照。
- 22) ケンブリッジ大学卒業後のミルトンの研鑽は、1632年7月にハマースミス (Hammer-smith) で始まった。母サラは、その後(1636年?) 移ったホートン (Horton) 時代に亡くなり、“the top of the center aisle in the chancel of Horton church” (Lewalski 67) に篤く埋葬された。なお、この年代については、Lewalski 53, 64; Parker 1: 119, 167; S [hawcross], “Retirement” 120-21などを参照。
- 23) Milton 8: 118-19. 同書は羅英対訳になっており、George Burnettによる英訳も参照。
ただし英訳については、French 5: 196に掲載された“a most *virtuous mother*, especially known for her charities throughout the vicinity” [Italics mine]の方が、より簡潔明瞭だと思われる。
- 24) この箇所での英語の引用はすべてFrench 5: 196-98によったが、その後に [] づけで示した和訳は拙訳である。なお、ここで提示した<関係者によるサラへの賛辞>については、Parker 1: 8; Lewalski 4を参照。
- 25) シュッキング 103-04. Cf. シュッキング 175.
- 26) このことについては、ミルトン自身が『第二弁論』において、両親への言及に続いて紹介している。詳しくは、新井、野呂 394-95を参照。
- 27) ミルトンがケンブリッジで、指導教官チャペル (William Chappell) と衝突し、停学処分を受けたことは有名だが、Parkerは、ミルトンが大学入学当初から、“idealistic determination to fulfil the high hopes of doting parents”と<大学での失望感>の狭間で悩んだ可能性を示唆している (1: 23)。なお、チャペルとの衝突については、Parker 1: 29-32を参照のこと。
- 28) たとえばミルトンが、当初<叙事詩の題材>として構想していたアーサー王伝承を、大陸旅行帰国後に断念したことは、その顕著な例である。詳しくはParker 1: 190を参照のこと。
- 29) Cf. Lewalski 71-74.
なお野呂「母と娘の脱<失樂園>」では、この詩における「詩人家父長制度」の存在が指摘されている (177)。
- 30) さらに10年後の父ジョンの逝去の折にも、

- ミルトンがエレジーを創作した記録はない。詳しくは Parker 1: 305 を参照。
- 31) それにしても、当時のミルトンの心境に関する Parker の指摘 (1: 155, 186) は、感傷的すぎるように思われる。
- 32) Cf. 「母が亡くなったこともあり、わたくしに諸外国、とくにイタリアを見聞したいという気持ちが強まってきたのであります」(新井、野呂 395)。
- 33) Lewalski (74) や Parker (2: 780-81) は、ミルトンが病床にあった母サラのために、旅行計画を延期していた可能性を提示している。
なお、ハンフォード (James Holly Hanford) は、ミルトンが早くから「独立」を望んでいたこと、また新婚の弟夫婦との同居を予想して、気詰まりだったことを示唆している (71)。弟夫婦との同居については、Parker 1: 167 も参照。
- 34) Cf. Parker 1: 167. *Lycidas* 執筆当時のミルトンの不安については、Parker 1: 155-56 を参照。
- 35) ミルトンの結婚観、および「夫に相応しい助け手」としての妻の役割については、たとえば佐野「ミルトンの愛の詩」(とくに 61-69, 77-89); 滝沢 (とくに 30-31, 36-38); 辻「愛と結婚」(とくに 223-36) などを参照。
- 36) Cf. 滝沢 30-31, 37; 佐野「ミルトンの愛の詩」69; 野呂「母と娘の脱〈失樂園〉」171, 177-78; 辻「愛と結婚」227-28.
- Gordian P, 1966.
- Hanford, James Holly. *John Milton, Englishman*. New York: Crown Publishers, 1949.
- Hughes, Merritt Y., ed. *John Milton: Complete Poems and Major Prose*. Indianapolis: Odyssey, 1957.
- 絹川久子. 『女性の視点で聖書を読む』. 東京: 日本基督教団出版局, 1995.
- Lewalski, Barbara K. *The Life of John Milton*. Blackwell Critical Biographies. Oxford: Blackwell, 2003.
- Lockwood, Laura E., ed. *Lexicon to the English Poetical Works of John Milton*. New York: Macmillan, 1907.
- Miller, Leo. "On the So-Called 'Portrait' of Sara Milton." *Milton Quarterly* 15. 4 (1981): 113-16.
- Milton, John. *Angli Pro Populo Anglicano Defensio Secunda*. Trans. George Burnett. *The Works of John Milton*. Vol. 8. Ed. Frank Allen Patterson, Eugene J. Strittmatter, et al. New York: Columbia UP, 1933.
- 野呂有子. 「母と娘の脱〈失樂園〉——女権神授説と『フランケンシュタイン』における『対等の配偶者』」. 辻、佐野 170-208.
- 越智文雄. 『ミルトン研究』. 1953. 京都: 同志社大学出版部, 1983.
- Parker, William Riley. *Milton: A Biography*. 2 vols. Rev. ed. Ed. Gordon Campbell. Oxford: Clarendon P, 1996.
- Patterson, Frank Allen and French Rowe Fogle, eds. *An Index to the Columbia Edition of the Works of John Milton*. 2 vols. New York: Columbia UP, 1940.
- 佐野弘子. 「ミルトンの女性観・結婚観をめぐる批評」. 辻、佐野 3-18.
- . 「ミルトンの愛の詩——伝統と創造」. 辻、佐野 59-92.
- レヴィン・シュッキング [Schücking, Levin] 著. 角忍、森田教実 共訳. 『読書と市民的家族の形成——ピューリタニズムの家族観』. 東京: 恒星社厚生閣, 1995. Trans. of *Die Familie im Puritanismus: Studien über Familie und Literatur in England im 16., 17., und 18.* 1929.
- S[hawcross], J[ohn] T. "Milton Family." A

参考文献

- 新井明、野呂有子 共訳. 『イングランド国民のための第一弁護論および第二弁護論』. ジョン・ミルトン著. 上尾: 聖学院大学出版会, 2003. Trans. of *Pro Populo Anglicano Defensio and Pro Populo Anglicano Defensio Secunda*.
- Bradford, Richard. *The Complete Critical Guide to John Milton*. The Complete Critical Guide to English Literature. London: Routledge, 2001.
- Campbell, Gordon. *A Milton Chronology*. Author Chronologies. London: Macmillan, 1997.
- French, J. Milton., ed. *The Life Records of John Milton*. 5 vols. 1949-58. New York:

- Milton Encyclopedia*. Vol. 5. Ed. William B. Hunter, Jr, et al. London: Associated UP, 1979. 137-39.
- . "Milton's Relatives." *A Milton Encyclopedia*. Vol. 7. 103-05.
- . "Retirement." *A Milton Encyclopedia*. Vol. 7. 120-21.
- 白鳥正孝. 日本ミルトン・センター第30回研究大会 (2004年10月16日、同志社女子大学) での、シンポジウム「ミルトン伝の一側面——W. R. Parker vs. B. K. Lewalski」司会者としての配布レジュメ.
- 竹下節子. 『聖母マリア——〈異端〉から〈女王〉へ』. 講談社選書メチエ. 東京: 講談社, 1998.
- 滝沢正彦. 「『失樂園』の夫婦像——『人間』への成長としての原罪」. 辻、佐野 19-58.
- 辻裕子. 「愛と結婚——ミルトンから『ジェーン・エア』へ」. 辻、佐野 209-46.
- 辻裕子、佐野弘子 共編. 『神、男、そして女——ミルトンの「失樂園」を読む』. 東京: 英宝社, 1997.